

# 社会文化的アプローチを用いた コンピュータを媒介とした第二言語習得

根本 浩 行

## 1 はじめに

マルチメディアが目まぐるしい発達を遂げてきている近年、第二言語教育では、対面型とオンライン学習を融合したハイブリッド型ディスコースをカリキュラムに導入する様々な取り組みが行われており、その一環としてコンピュータを媒介としたコミュニケーション(computer-mediated communication) (以下 CMC)が脚光を浴びるようになってきた。これまでの研究では、CMCがL1 (first language)に固執することなく学習言語を使用する意識を高める効果があることが論じられているだけではなく、すべての学習者により公平な授業内活動を提供し他の学習者との協働を促進すること、そしてより質の高いL2 (second language)ディスコースを生み出す役割を果たすことなどが明らかにされている(Cheng, 2010; Sullivan & Pratt, 1996; Warschauer, 1996)。また、主にオンライン口語チャットや音声・ビデオ会議システムを用いた同期 CMC (synchronous CMC) (以下 SCMC)においては、様々な遊び言葉を含んだやり取りを通して学習者が社会言語的能力を発達させ社会的コミュニティの構築をも可能とすることが示され、学習者の実用主義的モチベーションが CMC 環境を整え学習効果の向上へと繋がることが指摘されている(Darhower, 2002; Thorne, 2008; Warner, 2004)。その一方で、Eメール、オンライン掲示板やディスカッションフォーラムなどによるテキスト型の非同期 CMC (asynchronous CMC) (以下 ACMC)研究では、学生間の緊張関係や時間の制約を軽減し、フォームに焦点を当てた内省(focus-on-form reflection)だけではなく意味を重

視したコミュニケーション(meaning-oriented communication)を促進するとして、文書ディスコースの視覚的利点が強調されている(Lee, 2008)。

さらに、特筆すべきなのが、CMC はオンライン多国籍ネットワークの構築やディアスポラをも可能にし、国境を越えた個々の言語的、社会的、文化的、政治的連携を草の根レベルで促進するという点である(Lam, 2008; Miller & Slater, 2000)。CMC が文化や国の垣根を越える役割を担いうることを考慮すると、e ラーニングはもはや個人の言語学習を補助する手段としての範疇を超え、オーセンティックな異文化場面とそれに伴う社会文化的活動の供給源として活用される時代に突入したと考えるべきであろう。オンライン接触場面研究においては、現実の異文化インターアクション場面と同様に、学習者の母語規範や基底となる社会・文化規範とは異なる言語的・社会文化的慣習が形成されることが考えられ、その慣習への対応を通し学習者がどのように第二言語運用能力を発達させていくか、またオフラインでの第二言語学習とオンラインインターアクションがどのような相関性を持つかを考察することが肝要となる。さらに、テキストそのものに焦点を当てるだけではなく、文化、社会、コンテキスト、実践コミュニティ、学習者のコミュニティ内での位置取り、他者との関連性、モチベーション、そしてアイデンティティなどの社会文化的要因と学習者の言語使用活動を照らし合わせながら考察を進めることが不可欠となると考えられる。

本稿では、第二言語習得における社会文化的アプローチを用いた CMC 研究を紹介し、scaffolding、タスク型教授法(task-based language teaching) (以下 TBLT)、異文化間インターアクション、言語の社会化(language socialization) と CMC の融合性を考察することで、今後の CMC 研究の方向性について論究する。

## 2 Scaffolding と CMC

第二言語習得における社会文化的視座の発達 (cf. Zuengler & Miller, 2006; 根本, 2012, etc) により、CMC 環境においても広範な社会的コンテキストを

除外するのではなく許容することが可能となり、研究の対象として教室内活動だけではなく CMC を用いた授業外の非公式的学習活動にも目が向けられるようになってきた(cf. Warschauer, 2005)。Warschauer (2005)は、Kramsch, A'Ness, and Lam (2000)の授業外 CMC 環境の研究を取り上げ、CMC 環境では独特のディスコースが作り出され、学習者は CMC を利用することによりテキストを書くだけではなくテキスト産出上の規則を創り上げる能力を養うことができると強調している。また、授業外 CMC にて実在する対話者とのオンラインコミュニケーションに率先して取り組むことで動作主性(agency)を高め、自らの決断や選択の結末を見据えた意義のある行動を起こすことができるようになり、この動作主性が授業内外の第二言語学習や L2 コミュニケーションを促進する際にも役立つことが Kramsch et al.の研究では示唆されていると Warschauer は総括している。

さらに、認知発達とは社会的な意思疎通過程により促進されるとする Vygotsky の社会文化理論に基づき、scaffolding をこのような CMC による授業外学習活動に適用することにより、協働学習としての CMC を分析することが可能となった。アメリカの公立大学におけるスペイン語学習者を対象とした Lee (2008)の研究では、オンライン協働 scaffolding において、上級者の適切な指示、援助をもとに初級者がどのようにフォームに焦点を当てた内省を行うかが調査された。上級レベル 15 名と初級レベル 15 名からなる 15 組の熟達者・初心者ペア(expert-novice partnership)を本研究の調査対象とし、オンライン仮想教室でのチャットを利用し上級者が初級者にフィードバックやアドバイスを提供しながら三種類の異なるスペイン語タスクを協働で完成させる課題が与えられた。その結果、効果的なフィードバック交渉が最近接発達領域(zone of proximal development)内で他者制御された課題遂行活動から自己制御への移行を可能とすることが判明した。また、認知的要求の高い課題における調停手段としての L1 の重要性、メタ言語・メタ課題会話を生み出す手段としての L1 の教育上の意義が指摘され、L1 を使用することにより学習者の認知的な負担が軽減され、フィードバックのやり取りを促進し、共有する意思疎通場面でのフォームへの留意を促すことが明らかになった。

このLeeの研究ではSCMCが用いられたが、Eメールやディスカッションボードを用いたACMCによる補足も必要になるとの見解が示されている。そこで、ACMCを用いたscaffolding研究の一例を紹介しよう。Cheng (2010)はアメリカ南東の都市部に位置する大規模な公立大学にてCMC scaffoldingによる第二言語学術リテラシーの研究を行った。応用言語学修士課程で学ぶ非英語母語学生10名を対象とし、その中から3名（韓国人1名、ドイツ人1名、プエルトリコ人1名）に対してケーススタディを実施し、論述課題を遂行する上での対等者同士の相互scaffolding (collective scaffolding)を考察した。CMCを活用することにより、この3名の学生は論述課題の必須条件を概念化し、学術的引用法の実践能力や文章作成能力を高めるとともに、CMCを通して校正上のフィードバックや提案を頻繁に行うことで、英語学術リテラシーを発達させていった。また、オンラインディスカッションフォーラムにメッセージを投稿し、その内容に基づいて情報交換、議論を行うACMCを活用することで、参加者が頻繁に投稿メッセージの内容を精査することが可能となった。それゆえ、矢継ぎ早に意見交換が行われる授業での対面式の議論やオンラインチャットなどと異なり、内容を熟考した上でscaffolding提供者としての役割を担うことができるため、より意義のある協働ダイアログを生み出す環境を構築することができた。

熟達者や専門家からの援助を受ける通常のscaffoldingでは、受け取り側は受動的になってしまうことも少なくはないが、この研究で用いられた対等者同士の相互援助形式では、時には援助を受ける側であるが、場面によっては能動的援助提供者となることが求められていたことが主な特徴と言えよう。そのため、3名の研究対象者たちは援助を得る際もその能動性を活かし積極的に他の学生からの指示を引き出すことで、他者からの提案に基づき主体的な行動をとることができるようになっていった。また、継続的に能動的インターアクションを率先して進めていくことで、さらなる援助を得る機会を頻繁に作り上げることが可能となった。このことから、異なる活動において異なる役割が現れることが判明し、研究対象者は活動によって受け手、与え手として二つの異なる役割を切り替えることができることが示された。また、

ただ単なる授業外活動としてディスカッションフォーラムを利用するのではなく、課題とフォーラムを直結させ、カリキュラムの一部に組み入れたことが、学習の動機付けにもなったと考えられる。

上記の scaffolding による協働学習では、学習中の第二言語の使用法に関する話し合いを対象言語で行うことにより *Languaging* (Swain, 2006)が発生し、第二言語によるメタ認知能力の発達にも繋がっていると考えられるであろう。また、評価課題に基づいた明確な目標設定を行った上で CMC による第二言語活動に従事させているという点で、TBLT としての役割を兼ねていたことがわかる。そこで、次節では TBLT と CMC の融合性について考えてみたい。

### 3 TBLT と CMC

TBLT は、言語教育と実社会との関連性を重視し、オーセンティックな教材を用いて有意なコミュニケーションを取り入れたタスクを学習者に遂行させ、そのタスクの結果を評価の一部とする実践的な言語教授法である(Ellis, 2008; Skehan, 1996)。TBLT を含めた第二言語習得研究とテクノロジーを用いた言語学習研究は従来別々の分野として扱われることが常であったが、タスク型学習固有の柔軟でオーセンティックな目的ありきのコミュニケーションを実践させる上で、テクノロジーが豊富な機会をもたらすことがここ十数年の間に重要視されるようになってきた(cf. Adams, Amani, Newton, & Alwi, 2014; González-Lloret & Ortega, 2014)。また、CMC における TBLT の導入は、制約のない活動を極力回避し、目的駆動の社会的活動を提供する空間として CMC を活用すべきであるという社会文化的視座の高まりとともに始まったとも考えることができるであろう(cf. Doughty & Long, 2003; Lafford & Lafford, 2005)。これまでの研究では主に SCMC にて TBLT の適用が行われており、この組み合わせはタスク型 SCMC (task-based synchronous computer-mediated communication) (以下 TB-SCMC)と呼ばれている。Collentine (2009)は TB-SCMC に関するいくつかの先行研究を紹介し、通常の SCMC とタスク型

の違いとして、TB-SCMC では意味の交渉が頻繁に起こりうること、タスク型の状況下ではタスクを完成させるという最優先の目標があるため言語の正確性より流暢さに重きを置く傾向が強いことを挙げている(Chen, Belkada & Okamoto, 2004; Lee, 2002; Smith, 2003, 2005)。

Collentine (2009)は自らの研究で、スペイン語中級および上級学習者のディスコース上の語用論的言動や社会文化的行動を TB-SCMC 用いて調査した。学習者の行動を分析するために Ellis (2003)や Tarone (2007)の見解をもとに社会文化的視座を取り入れ、データ分析過程における複合的アプローチを用い、テキストや言語的コンテキストだけではなく社会的コンテキストと学習者の社会的姿勢を考察し、ユーモア、共感を生み出すための対人ディスコースや知識格差を埋める試みなどの社会的目的から TB-SCMC 上のテキストが生み出されることを指摘した。さらに、学習者の課題達成目標への姿勢が、社会的行動への意欲を促進することが示された。

CMC と TBLT の融合に関しては、今後 ACMC においても必要となるであろう。Adams et al. (2014)は ACMC によるライティング研究として Kern (1996)の E メールコミュニケーションの調査と Warschauer (1997)の学術論文オンライン出版過程の調査を挙げ、タスク型 ACMC をライティングプログラムに統合することで、オンライン上の読み手をより意識した文章作成が可能となり、オーセンティックなライティング経験を学習者に提供することができると論じている。また、Adams et al. (2014)自身の研究においては、タスクの複合性に焦点を当て、マレーシアの技術大学で学ぶ 45 人の学生を対象として、ACMC に基づいたライティング課題における事前タスクとオンラインプランニングの役割を検証している。

さらに、Nemoto (2014)の研究では、日本の大学とオーストラリアの大学間で行われていた E メール交流プロジェクトをもとに、日本人学習者の第二言語学術リテラシーの発達過程の調査がなされた。このプロジェクトは、非公式的な授業外英語インターアクションを通して個人レベルでの異文化ネットワークの形成を促進するだけではなく、日本人学生がオーストラリアの大学生とのやりとりで得たオーセンティックな社会文化的情報を論述課題に取り

入れ自らの意見を具体化させ、論理的文章構成力を養成するという点で、課題に基づく目的駆動型の ACMC の一例となる。TBLT と CMC の融合に関してはまだ未開拓の部分が多く残っているため、e ラーニングによるオーセンティックな異文化場面の構築を促進し CMC の可能性を追求していく上では、同質の様々な視点からの質的・量的研究が今後必要となる。特に、Nemoto (2014)にみられるような異文化間協働によるタスク型 CMC は、社会文化的言語使用活動を学習者に提供し第二言語リテラシー能力の発達を促す上で不可欠と考えられる。

#### 4 異文化間インターアクションとしての CMC

テクノロジーの発達に伴い、第二言語習得の手法は多岐にわたり、異文化間インターアクションの捉え方自体にも変化を及ぼしている。特に、telecollaboration（遠距離通信による協働）と呼ばれるインターネットを媒介とした異文化間外国語教育を用いた CMC は、テクノロジーの進歩により発生した新種の異文化通信形態の一例として異文化間インターアクションにおける新たな可能性をもたらしていると言えるであろう (Belz, 2008; Belz & Thorne, 2006; O'Dowd, 2007; Warschauer & Kern, 2000)。Warschauer (2005)は telecollaboration に関するいくつかの実証研究を挙げ、複数の授業による横断的学習を分析する上での社会文化的視座の有用性を論じている。その中で、Warschauer (2005)は、Vygotsky の社会文化理論を用いてアメリカ人学生とフランス人学生のオンライン遠距離通信によるテクノロジー型言語教育を調査した Thorne (2003)の研究を紹介し、オンラインの異文化間インターアクションが文法学習にもたらす肯定的効果を示唆している。また、Thorne の研究が、コンピュータを媒介としたプロジェクトという形式を用いた社会的学習の認知度を高める一助となったとの見解を示している (Warschauer, 2005)。

Belz (2008)は、過去の文献を論評することにより、L2 語用論に関してこれまで包括的な研究が行われてきていない二つの分野における telecollaboration の役割を考察している。一つは、教材の有用性と真正性、そしてもう一つの

分野は L2 ディスコースの多様性を学習者に経験させ有意なインターアクションを実践する場を提供する方法である。Belz は、学習者は telecollaboration におけるチャット、メール、インスタントメッセージやウェブサイトを通し母語話者の語用実例に触れることが可能となるだけでなく、語用能力を高めるための系統だった考察を促進できることを強調し、telecollaboration は自然状況下で起こる母語話者との連携やプロジェクト型のインターアクション実施場面を提供する媒体として適していることを論証している。そのため、telecollaboration を活用することで、オーセンティックな教材を身近なものとし、有意なインターアクションに取り組むより多くの機会を学習者に与えると同時に L2 語用能力の発達を促進することが可能となると Belz は論じている。また、上記以外に調査不十分な分野として Belz が指摘したのは、L2 語用能力発達過程の長期的調査、そして教室内の L2 語用指導法への教育学的介入である。体系的 L2 語用コーパスを構築し語用能力の発達過程を補助する上での CMC の有用性や CMC を用いた評価法関しても言及している。

これらの研究と論評は、異文化間インターアクション研究における新たな側面を提示し第二言語習得における CMC の有用性を再考する上で画期的ではあるが、先行研究では主に文法能力と語用論のみに限られているところが、残念な部分である。文法能力のみならず社会言語的、社会文化的能力を含んだ第二言語インターアクション能力や異文化能力、そして第二言語リテラシーの発達過程に関する telecollaboration の研究も今後大いに求められてくることとなるであろう。

## 5 言語の社会化と CMC

社会文化理論の一つとして応用言語学研究に多大なる影響を与えている言語の社会化(language socialization)は、他者とのインターアクションを通した社会文化的・言語的能力発達の研究として 1980 年代に考案され、当初は子供の L1 習得の研究に用いられていたが、最近では第二言語学習者の研究に頻繁に適用されるようになってきた(cf. Duff & Talmy, 2011; Zuengler & Miller,



2006)。言語の社会化は、ある特定コミュニティの新参者が言語的慣習や社会的インターアクションに従事し、特定領域の知識、信条、情緒、役割、アイデンティティ、社会的表象を学んでいく過程として定義されている(Duff, 1995; Schieffelin & Ochs, 1986)。この理論では、発達とは文化的に状況に埋め込まれ、調停されるものとされ、命題的で観念的であるだけでなく社会的、文化的、政治的意味合いを含んでいるとみなされている(Duff, 2010)。そのため、学習対象となる言語に熟達した他者とのインターアクションを重視し、新参者に社会文化的慣習の知識や対象言語を使用する規範的方法を明示的・暗示的に教えてくれる他者との関連性に着目した言語習得理論となる(cf. Duff, 2007, 2010)。また、他者との関わり合いの中で、学習者は言語的な知識を得てその対象言語を適切に運用し、特定談話コミュニティに参加する能力を高めていくにつれて、そのコミュニティ内で重んじられるイデオロギー、アイデンティティ、主観性、情動的姿勢、言語的・非言語的慣習に関する文化的知識や情報を得ることができると考えられている(Duff, 2010; Ochs, 1986)。さらに、言語の社会化は、特定コミュニティにおける新参者が他者との関わり合いの中で社会文化的慣習に基づいた活動に取り組むことで、徐々に十全参加者となっていく軌道を示し、その発達過程に働きかける社会文化的要因の考察を可能にすることで、第二言語習得における社会文化的アプローチの発展を導いてきた理論として捉えることができる。

この理論を応用したCMC研究はこれまで包括的には行われてはいないが、いくつかの実証研究において、オンライン実践コミュニティにおける第二言語への社会化が考察されている。Lam (2004)は、アメリカに住む10代の中国人移民者2名を対象に、オンライン上の中国語と英語のバイリンガルチャットルームで起こる社会的かつ散漫な慣習と英語学習との関連性を調査し、インターネットでのチャットが第二言語の社会化を促進する補足的コンテキストとしてどのように機能するかを考察した。この2名の研究対象者は、学校では英語話者の友人との意思疎通に苦勞していたが、インターネット上では世界各国の中国系の若者との社会的・民族的帰属意識を高めるためローマ字化された広東語を含んだ変種英語を混成言語コードとして用い、英語と広東

語のバイリンガル話者としての相互交友関係を構築した。英語主体から広東語主体まで異なる度合いの混成ディスコースを使用することで会話の流れを維持し、研究対象となった中国人移民者たちは、英語を話す上での自信を高め、アメリカの実社会における英語使用場面に参入する際の自尊心の植え付けへと繋げていった。この種の言語を活用することにより、2名の研究対象者とその友人たちはバイリンガル中国人海外移住者としての集約的民族アイデンティティを高め、アメリカ人英語話者や中国人広東語話者として一概に区別されることのできない新種のアイデンティティを形成するに至った。英語話者としての中国系アメリカ人か広東語話者の中国人か、アメリカにおいて英語を習得していく上で明確な立場を確立することが通常求められるが、オンライン環境で混成言語コードを用いることにより研究対象者は第3のポジションを作り上げ、その新しいポジションが英語学習者としての社会的位置取りや英語との関わり方に影響し、アメリカの地方都市での社会的場面への参入をも助長する結果となった。

また、Duff (2010)は Yim (2005)と Potts (2005)の研究を例に挙げ、テクノロジーを介した新たな種類の談話コミュニティの重要性に着目し、オンラインディスカッションを融合した授業における言語の社会化を論じている。Yim (2005)は、カナダの大学院で教育学を専攻する英語母語話者と非母語話者を公式的・非公式的なオンラインディスカッションフォーラムにおいて混在させた CMC 調査を実施した。その結果、あまり構造化されていない非公式的ディスカッションフォーラムでは、より多くの投稿があり、普段とは異なる文脈における異種の言語使用が起こった。さらに、個々の役割がより頻繁に顕在化することにより作成する文章に対する責任感を高め、教員からの指示や指導よりも仲間内の意思疎通法やフォーラム内で使用される語彙を観察することによって非母語話者たちは参加の仕方を学んでいった。大学院言語・リテラシー教育専攻の授業に同様の混合モード形式を取り入れた Potts (2005)の研究においては、非英語母語話者が意図的に他者の投稿を分析、借用、模倣することによって、規範や慣習がまだ固定化していない談話コミュ

ニティを協働的に構成していくことが示され、双方向で多面的な社会化が起こることが明らかになった。

上記の研究から分かるように、CMC に言語の社会化を適用することにより、学習者のアイデンティティ、モチベーション、他者との関連性、コミュニティ内での位置取りなどがより如実に浮かび上がってくる。言語の社会化は、CMC 環境においても第二言語習得過程に付随する社会文化的要因の考察の深化に有効に寄与している理論と言えよう。しかし、その一方で、社会文化理論の一つとして様々な応用言語学研究の研究枠組みを担ってきた正統的周辺参加理論(*legitimate peripheral participation*)(Lave & Wenger, 1991)でも指摘されているように、言語の社会化の扱い方に関しては理論上の限界が取り上げられ、時に誤った認識のもとに概念化されることが問題とされていることも軽視できない。Duff は学術コミュニティでの言語の社会化を例に挙げ、新参加者が言語の社会化を進めていく上でその直接的・間接的支援を行うと考えられている専門家や熟達者は常に有能な助言者や指導者とはなりえないことやフォーマルな技術的・学術的ディスコースの習得だけではなく授業内のディスカッションやより日常的な何気ないインターアクションで起こる対人コミュニケーションも学生たちが言語の社会化を進めていく上での鍛錬の場となりうることを指摘している(Duff, 2007, 2010)。また、言語の社会化理論そのものが適用範囲の広い研究枠組みとなるため(Duff & Talmy, 2011)、学習者が社会文化的活動に取り組み言語的・社会文化的能力を発達させていく過程の中でどのような心的表象が現れるかをより入念に考慮することも責務となるであろう。

前述のように、CMC は対面型インターアクションよりも豊富な第二言語習得リソースを学習者に提供し、対面型と CMC を混成した *blended learning* を用いることでより体系化した第二言語学習が可能となると考えられているが、言語の社会化に関する上記の理論的限界を補う効果が CMC にあるのか、それともオフライン場面と同様のもしくは異種の障害が存在しうるのかを検証しながら、CMC 特有のアフォーダンス(*affordance*)が言語の社会化にどのように作用するのかを考察していくことが求められる。

## 6 おわりに

本稿では、第二言語習得における社会文化的視座から CMC を捉え、scaffolding、TBLT、異文化間インターアクションおよび言語の社会化を組み合わせた様々な CMC 研究を論評することで、CMC が第二言語習得上の認知的・社会文化的過程の更なる探求を可能とする新たな領域として蓋然性があるかどうかを考察した。その結果、社会文化理論との融合により CMC が文法能力のみならず社会言語的・社会文化的能力を促進する目的駆動型の社会的行動を助長することが明らかになり、学習者がオーセンティックな活動に取り組む上での健全な空間を提供し、自らが用いる第二言語に対し分析的な目を養わせることが可能となることから、応用言語学研究において将来的発展が期待できる領域であることが分かった。今後の CMC 研究の方向性としては、読解、内省、ライティング、テキストの修正、コメントの投稿などにより多くの時間が確保でき、論述能力の発達過程を自己管理し論理的思考力の養成にも繋がる ACMC の更なる調査が必要となることが予想される (cf. Adams et al., 2014)。特に、L2 ライティングやリテラシーに焦点を当てた異文化間 TB-ACMC を用いて、他者との協働性、第二言語能力の発達過程、コンテキスト、モチベーション、アイデンティティなどを質的に研究し、社会文化的考察を加えることで、オーセンティックな言語運用活動を導入した言語教授法を体系化する手がかりを見い出すことができるのではないかと考えられる。

前述の Nemoto (2014)の研究は、異文化間 TB-ACMC のこれからの研究方法を示唆する予備研究として位置づけることができるであろう。この研究では、質的調査に量的データを取り入れた混合法(mixed method)を用いて、情報収集・分析能力を含めた英語学術リテラシー能力の発達過程を検証し、主要因の例証と発生プロセスの考察を行った。ACMC における第二言語の社会化には、母語による換言、帰納的論法によるアイデアの明瞭化、読み手認識、異文化間の類似点の認識、フォーカス・オン・フォームなどによる言語管理活動が伴い、これらの活動が状況におけるアイデンティティの変容およびメ

タ認知・認知能力の発達へと繋がることで第二言語習得がさらに促進されることが判明した。ACMCの導入法とTBLTのライティングへの適用に関しては、既存の言語産出理論の再概念化が必要となるとも言われているが（cf. Adams et al., 2014; Manchón, 2014）、社会文化的アプローチを用いることで、今後異文化間TB-ACMC環境に適した理論的・教育的枠組の構築が進むのではないかと考えられる。近い将来、異文化間TB-ACMCプロジェクトを用いた教育実践と研究が、グローバリゼーションが進む昨今の新たな第二言語習得のあり方を導き出すことを期待したい。

## 参考文献

- Adams, R., Amani, S., Newton, J., & Alwi, N. (2014). Planning and production in computer-mediated communication (CMC) writing. In H. Byrnes & R. M. Manchón (Eds.), *Task-Based Language Learning - Insights from and for L2 Writing* (pp. 137-161). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Belz, J. A. (2008). The role of computer mediation in the instruction and development of L2 pragmatic competence. *Annual Review of Applied Linguistics*, 27, 45-75.
- Belz, J. A., & Thorne, S. L. (Eds.). (2006). *Internet-mediated intercultural foreign language education*. Boston: Heinle & Heinle.
- Chen, J., Belkada, S., & Okamoto, T. (2004). How a web-based course facilitates acquisition of English for academic purposes *Language Learning & Technology*, 8(2), 33-49.
- Cheng, R. (2010). Computer-mediated scaffolding in L2 students' academic literacy development. *CALICO Journal*, 28(1), 74-98.
- Collentine, K. (2009). Learner use of holistic language units in multimodal, task-based synchronous computer-mediated communication. *Language Learning & Technology*, 13(2), 68-87.
- Doughty, C. J., & Long, M. H. (2003). Optimal psycholinguistic environments for distance foreign language learning. *Language Learning & Technology*, 7(3), 50-80.
- Duff, P. A. (2007). Problematising academic discourse socialisation. In H. Marriott, T. Moore & R. Spence-Brown (Eds.), *Learning discourses and the discourses of learning* (pp. 1.1-1.18.). Melbourne: Monash University ePress.
- Duff, P. A. (2010). Language socialization into academic discourse communities. *Annual Review of Applied Linguistics*, 30, 169-192.

- Duff, P. A., & Talmy, S. (2011). Language socialization approaches to second language acquisition: Social, cultural, and linguistic development in additional languages. In D. Atkinson (Ed.), *Alternative Approaches to Second Language Acquisition* (pp. 95-116). London: Routledge.
- Ellis, R. (2003). *Task-Based Language Learning and Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- González-Lloret, M., & Ortega, L. (2014). *Technology-mediated TBLT: Researching Technology and Tasks*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Kern, R. (1996). Computer-mediated communication: Using e-mail exchanges to explore personal histories in two countries. In M. Warschauer (Ed.), *Telecollaboration in Foreign Language Learning: Proceedings of Hawaii Symposium* (pp. 105-119). Honolulu: University of Hawaii Press.
- Kramsch, C., A'Ness, F., & Lam, W. S. E. (2000). Authenticity and authorship in the computer-mediated acquisition of L2 literacy. *Language Learning and Technology*, 4(2), 78-104.
- Lafford, P. A., & Lafford, B. A. (2005). CMC Technologies for Teaching Foreign Languages: What's on the Horizon? *CALICO Journal*, 22(3), 679-709.
- Lam, W. S. E. (2004). Second language socialization in a bilingual chat room: Global and local considerations. *Language Learning and Technology*, 8(3), 44-65.
- Lam, W. S. E. (2008). Language socialization in online communities. In P. A. Duff & N. H. Hornberger (Eds.), *Encyclopedia of language and education Volume 8: Language socialization* (pp. 301-312). Vancouver: Springer.
- Lave, J., & Wenger, E. (1991). *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lee, L. (2002). Enhancing learners' communication skills through synchronous electronic interaction and task-based instruction. *Foreign Language Annuals*, 35, 16-23.

- Lee, L. (2008). Focus-on-form through collaborative scaffolding in expert-to-novice online interaction. *Language Learning & Technology*, 12(3), 53-72.
- Manchón, R. M. (2014). The internal dimension of tasks: The interaction between task factors and learner factors in bringing about learning through writing. In H. Byrnes & R. M. Manchón (Eds.), *Task-Based Language Learning - Insights from and for L2 Writing* (pp. 27-52). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Miller, D., & Slater, D. (2000). *The internet: An ethnographic approach*. Oxford: Berg.
- Nemoto, H. (2014). The development of L2 academic literacy through online intercultural networks. In E. Stracke (Ed.), *Intersections: Applied Linguistics as a Meeting Place* (pp. 149-170). Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing.
- Ochs, E. (1986). Introduction. In B. Schieffelin & E. Ochs (Eds.), *Language Socialization Across Cultures* (pp. 1-13). Cambridge: Cambridge University Press.
- O'Dowd, R. (Ed.). (2007). *On-line Intercultural Exchange: A Practical Introduction for Foreign Language Teachers*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Potts, D. (2005). Pedagogy, purpose, and the second language learner in on-line communities. *Canadian Modern Language Review* 62, 137-160.
- Schieffelin, B., & Ochs, E. (1986). *Language Socialization Across Cultures*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Smith, B. (2003). Computer-mediated negotiated interaction: an expanded model. *The Modern Language Journal*, 87(1), 38-57.
- Smith, B. (2005). The relationship between negotiated interaction, learner uptake, and lexical acquisition in task-based computer-mediated communication. *TESOL Quarterly*, 39(1), 33-58.
- Sullivan, N., & Pratt, E. (1996). A comparative study of two ESL writing environments: A computer-assisted classroom and a traditional oral



- classroom. *System*, 29, 491-501.
- Swain, M. (2006). Languaging, agency and collaboration in advanced second language proficiency In H. Byrnes (Ed.), *Advanced Language Learning: The contribution of Halliday and Vygotsky* (pp. 95-108). London: Continuum.
- Tarone, E. (2007). Sociolinguistic approaches to second language acquisition research—1997-2007. *The Modern Language Journal*, 91, 837-848.
- Warschauer, M. (1996). Comparing face-to-face and electronic communication in second the language classroom. *CALICO Journal*, 13(2), 7-26.
- Warschauer, M. (1997). Computer-mediated collaborative learning: Theory and practice. *Modern Language Journal*, 81, 470-481.
- Warschauer, M. (2005). Sociocultural perspectives on CALL. In J. L. Egbert & G. M. Petrie (Eds.), *CALL Research Perspectives* (pp. 41-51). Mahwah, New Jersey Lawrence Erlbaum Associates.
- Warschauer, M., & Kern, R. (2000). *Network-based Language Teaching: Concepts and Practice*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Yim, Y. K. (2005). *Second language speakers' participation in computer-mediated discussions in graduate seminars*. University of British Columbia, Vancouver, Canada.
- Zuengler, J., & Miller, E. R. (2006). Cognitive and sociocultural perspectives: Two parallel SLA worlds? *TESOL Quarterly*, 40(1), 35-58.
- 根本浩行 (2012). 第二言語習得研究における社会文化的アプローチ 言語文化論叢, 16, 19-38.



# **Sociocultural Approaches to Computer-Mediated Second Language Acquisition**

Hiroyuki Nemoto

## **Abstract**

As is the case with face-to-face communication in L2 learning, computer-mediated communication (CMC) has been increasingly investigated from the sociocultural perspectives of second language acquisition (SLA), which enable us to attend to rather than remove the broader social and discursive contexts from research data (cf. Warschauer, 2005). This approach has led CMC researchers to reconsider e-learning not only as a means of assisting individual language learning but as a source of providing language learners with authentic sociocultural activities and has also made such researchers more aware of intricate relationships between CMC and its sociocultural factors, including cultures, contexts, communities where learners participate, their social positionings in the communities, power relations with others, L2 identities and L2 learning motivations. This paper reviews various previous CMC studies and then argues the applicability of several sociocultural and pedagogical concepts to CMC research, including the Vygotskian notion of scaffolding, task-based language teaching, intercultural interactions, and language socialization. The sociocultural analyses of CMC in this paper suggest that CMC enhances students' goal-driven social actions to promote grammatical, sociolinguistic and sociocultural competence in L2 and provides affordances that help students to apply an analytical lens on their own L2 production.